

「乳がんお守り」

朝日新聞

2012年(平成24年)
5月30日
水曜日

長い治療「心の支えに」 乳がん専用お守り作る

九度山・慈尊院で販売



乳がん撲滅などを願い昨年奉納した「おっばい絵馬」の前でお守りを見せる梅村定司・センター長(左)ら＝九度山町慈尊院



乳がん治療に取り組み橋本市の病院が、患者団体や九度山町の慈尊院と協力して、「乳がん限定のお守り」を作った。同院で完成を祝って祈禱をした。

橋本市岸上の紀和病院「紀和プレスト(乳腺)センター」。病院に通う患者の団体「ひだまり」や慈尊院と協力してデザインなどを考え、縦約5センチ、横約3・5センチのピンク色のお守り約500個を作った。

慈尊院は弘法大師の母をまつり、昔から女性たちが良縁や安産を祈願して乳房型の絵馬を奉納してきた。乳がんの患者の参拝者も多いという。

梅村定司・センター長によると、乳がんは他のがんと比べて治療期間が長いと、心のケアが重要になる。「気軽に持ち歩いて、患者さんの心の支えになるお守りを作りたい」と考えたという。2007年に手術をし、月1回検診に通っているという紀の川市の主婦木村由佳子さん(51)は「このお守りがあれば心の支えになる」と話した。

お守りは1個500円で慈尊院で販売している。問い合わせは同院(0736・54・2214)へ。

THE YOMIURI SHIMBUN
読賣新聞

2012年(平成24年)
5月23日水曜日

乳がん闘病の支え

慈尊院がお守り

「おっばい寺」の愛称がある九度山町の慈尊院が、乳がん撲滅を願うお守りを作り、22日、開眼法要を行った。「闘病生活を乗り切るため、心に安らぎがほしい」という乳がん患者の声から企画したという。慈尊院は、空海の母が住んだとされる「女人高野」とも呼ばれる。女性が安産などを祈って乳房形の絵馬を現した。

患者も参加 開眼法要

持ち歩きやすいように高さ5センチ、幅3・5センチ小ぶりにし、西陣織の生地の色は、乳がん撲滅の象徴となつてピンクを選んだ。乳がん患者会「ひだまり」の会員に話を聞いたところ、「がん」という言葉は怖い」という声があつたため、パッケージには「乳がん平癒御守」と記したが、お守り自体には「平癒守」と記すのみとした。



乳がん治療を願うお守りを手にする安念住職(九度山町の慈尊院で)

この日法要には、患者ら約10人が参加。5年前に乳がん切除手術を受けたという紀の川市粉河の患者会副会長、木村由佳子さん(51)は、「闘病生活はつらかったが、周りに助けを求めた。そのありがたさを忘れないために、いつも身に着けてほしい」と話していた。

乳がん患者の支えに



開眼法要の後、安念住職(右)から「乳がん守り」を受ける梅村センター長＝九度山町の慈尊院で

MAINICHI
新毎日
5月23日(水)
和歌山



患者の思いが込められた「乳がん守り」

お守り作り法要 慈尊院

九度山町 乳房形奉納や安産、授乳の寺として知られる九度山町の慈尊院(安念清邦住職)が「乳がん守り」を作り22日、開眼法要を行った。制作に協力した紀和病院「紀和プレスト(乳腺)センター」(橋本市)の患者会「ひだまり」の副会長、木村由佳子さん(51)は「乳がん治療はつらく長い闘い。多くの患者さんの心の支えになつてほしい」と話した。

開眼法要には会員2人も参列。梅村定司・センター長にできたばかりのお守り100体が授与された。希望する患者に贈るといふお守りは参拝者に授与(500円)するほか、電話・ファクス(0736・54・2214)でも受け付ける。

【上欄弘志】